

空間構成による経験と想起

ぼーっとできる建築

研究背景と目的

ぼーっとすること - コロナ禍での気づきから -

コロナ禍での自粛生活で家にいる時間が増えたときに明らかにこれまで普通に外出していた生活との経験や記憶に関する違いを感じた。“おうち時間”というキーワードを検索して家にいる間、常に何か目的を探して時間を過ごそうとしていた。そんな中、ネット世界でもなく目的的な活動でもなく、何もせずぼーっとできる時間を持つことへの欲求を感じた。

「僕らは現実から逃れるためではなく、現実のありようを受け入れるために夢を求めている。単一の現実にいる時、人は本当のところ、現実を見ることはできない。物事を絶対評価しながら理解することは容易ではなく、僕らは物事を比較しながら、相対性の中で位置付けていくことでしか世界を理解することができないのだ。(中略)だから僕らを知るために夢を見る必要がある。それこそが居場所をつくるということの本質ではないかと思うのである。」
東京大学の石田康平氏は新建築 2021年10月号の論考「夢の中で暮らすことから始まる都市の公共性のこれから」※1)

東京大学の石田氏は自身の論考でコロナ禍での自粛生活に対して、人はもともと空間や場所の移動によって“複数のリアリティを生きている”と表現し、現実のありようを受け入れるために夢をみる必要がある。と述べている。

私が家の中でぼーっとしたいと感じたことは住宅の中で石田氏が言うところの夢を見るように現実から少し離れた感覚が欲しかったのだと考える。

都市の中でぼーっとするためには

意思とは関係なく、自然を前にするとぼーっとできるのに対して、私が家の中で窓からの景色を前にしてもぼーっとできなかったのは何故なのか。ぼーっとする時は、今いる現実から少し離れ、自分のいる状況を自分だけの想起の世界として感じるのだと考える。窓からの景色では自由な想起が生まれず、建築の中にいながら、“今、ここ”という感覚から私を包み込む建築やその周りの一つの世界を広がりを持って想起できる状況にあることが必要である。

そのためにはそこに至るまでの経験の蓄積による空間構成の把握と空間による想起/想像が必要だと考えた。

経験と想起に関わる構成の分析 - 事例研究から -

複数のリアリティを自己の中に入える建築が持つべき特徴 [連続した経験が蓄積すること]、[経験が想起されること] を軸に事例を分析し分類した。

経験による空間構成の把握

常に新しい景色を前にして
自然の洞窟の中を歩くような感覚
全体像が掴めない



坂牛邸

回遊性や見え隠れの関係から
歩いた経験によって全体像を把握する



中心のある家

経験による
空間構成の把握
できない



house&BowBow

空間構成による想起 / 想像



鶴岡邸

どんな空間構成かわかっていても、
上下階の関係性がないために
自然発生的な想起を生まない

スキップフロアによる見え隠れと
屈折した柱の中心的軸の存在によって
上下に続く橋を想像する

空間構成と
想起の関係

ある

できない

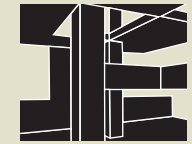
ない

内外での経験の蓄積



那須の山荘

外部から見えるものと
内部で見えるものが違うことで
想起の余地が残っている



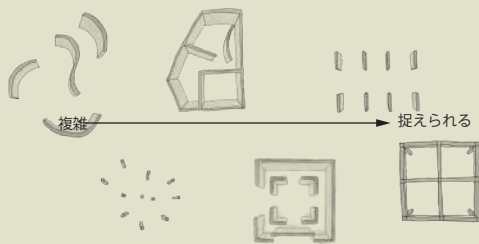
古澤邸

外観から把握できてしまうために
経験による把握の前に
客観的な把握ができてしまう

事例の分析から経験と想起に関わる空間構成がもつ特徴を四つにまとめ、設計提案に繋げる。

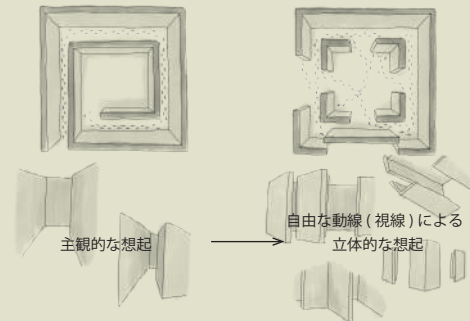
■複雑すぎない / 捉えられる構成であること

複数の側面から見ることによって主観から離れた立体的に想起することができる。そのことが全体像への把握へ繋がる。

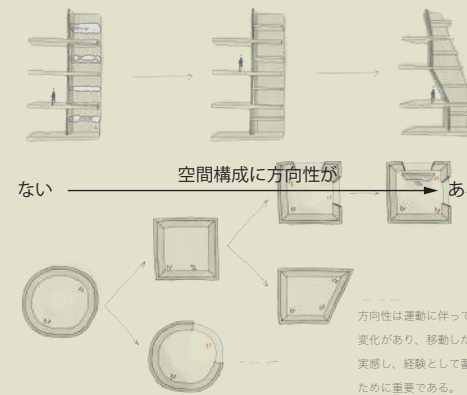


■構成に対して自由な動線 / 視点があること

ある程度の規則性やルールがある構成であることで、経験した空間を想起しやすくなり、また先を想像することができる。

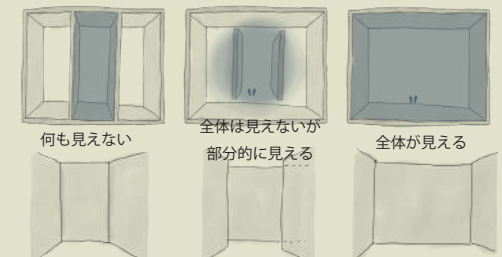


■構成に方向性があること



■全体を見渡せないが部分的に見えること

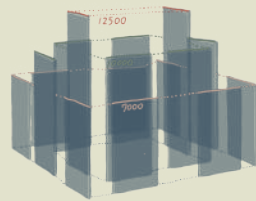
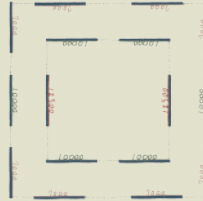
内部からでも外部からでも一つの場所から全体を見渡せないことによって、想像の余地が生まれ、自分の記憶に頼って想起する。また、部分的に見えることで中動的にその続きを想像する。



計画 / 設計提案

全体と住戸の関係

集合住宅には集合住宅全体の空間構成と一住戸単位の空間構成がある。一つの場所に身を置きながら、自分の家へ、建築全体へと経験の想起が広がるために、それら二つの規模の構成が独立しながらも繋がっている提案をする。そこで幾何学的構造でもある、フラクタル構造を参考にする。フラクタル構造は部分から全体が成り立っているが、部分も全体とも捉えることができる。このように、集合住宅とその住戸の構成が連続してつながり、どちらも一つの構成として捉えられる関係を目指す。

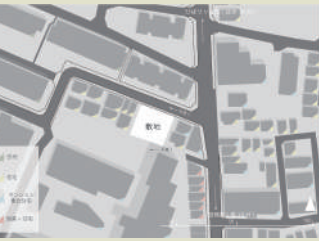


全体の空間構成 - 壁柱 -

構成を作り出す要素として複数ある住戸を分断せずに横断しながら全体の構成を作り出すために、幅を持った垂直材である壁柱を採用する。部分的な体験からその全体を想像できるようにそれらを連立させ、入れ子に配置した。その壁柱に高さを設定することにより光環境を調節すると共に、幾何学的な構成に方向性を作り出している。

敷地

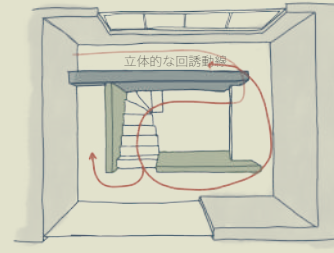
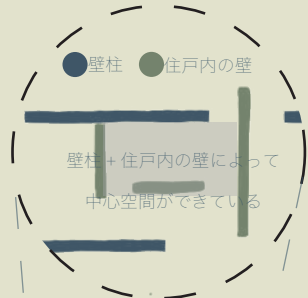
東京都西東京市谷戸町、西武池袋線ひばりヶ丘駅から徒歩10分の住宅街に集合住宅を提案する。郊外の住宅街で都心部に比べたら、緑などはあるが、公園などの部分的なものに限られており、街の都市化により道などは緑が少なく、特にこの敷地はマンションや団地に囲まれていることによって景色に対してぼーっとできる隙間がないため、建築の中でぼーっとできる住宅を提案する。



住戸内の空間構成

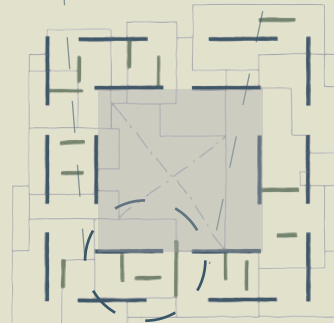
住戸は凹凸を持った不規則な形態で外殻からは構成を捉えられず、住戸の中を歩き回ることによって把握する。住戸の中は壁柱と住戸内の壁によって中心を持った構成となっている。不規則な形態の中での中心のある構成とは吹き抜けや光環境など空間の質によって中心性を保っている。

またメゾネットによって立体的に回遊動線を生んでいる。



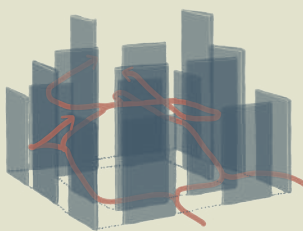
フラクタルな関係

集合住宅に中庭という中心を作り出している壁柱は、住戸の中でまた中心を持った構成を作り出し、フラクタルな関係ができている。



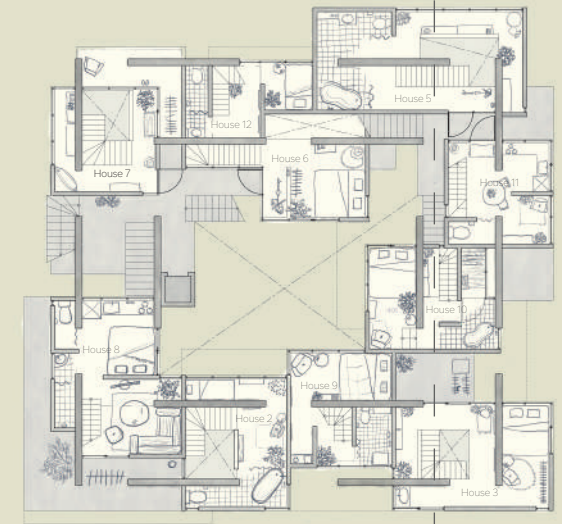
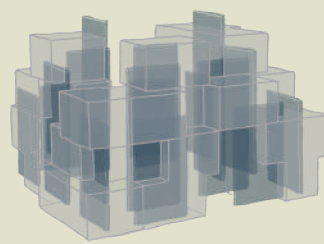
共有動線

共有通路は壁柱の間を縫うように通っていて屋上にたどり着くまでに様々な角度からその壁柱の配置を見ることができ、全体像の把握に繋がる。

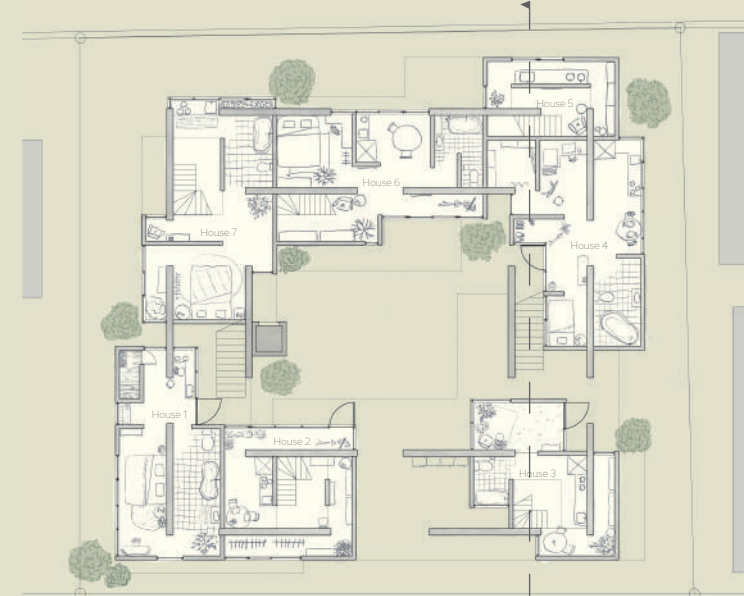


見え隠れする壁柱

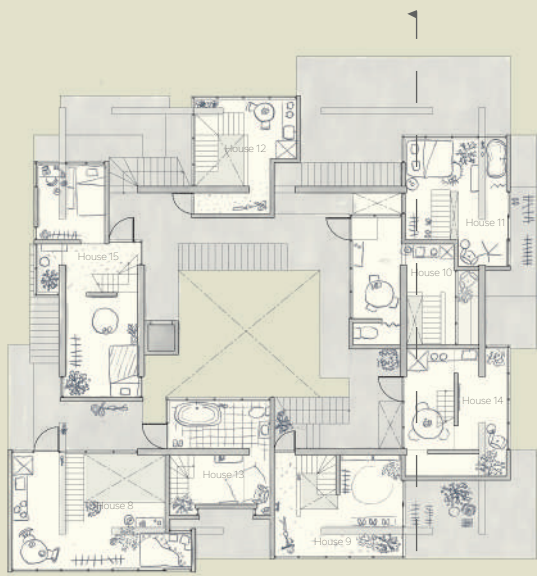
真ん中に中庭を囲うような配置の壁柱に対して凹凸を持った住戸が付随していることによって、壁柱に見える部分と見えない部分が生まれる。



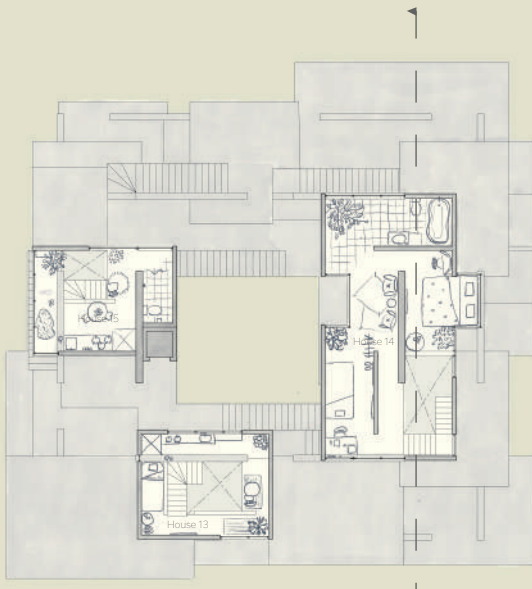
二階平面図



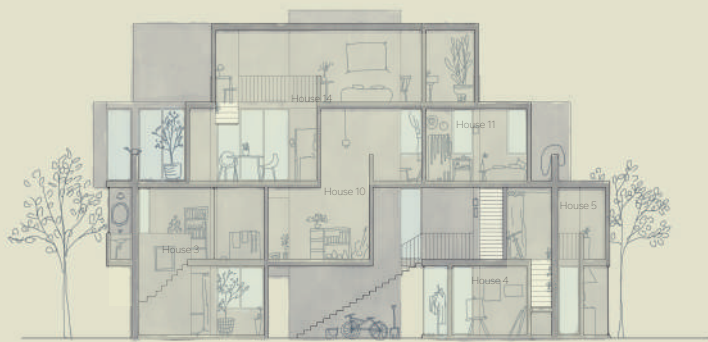
一階平面図 0 1 2 5 10 (m)



三階平面図



四階平面図



断面図

(m)



捉えようのない外観から、見え隠れする壁柱などの少しずつ蓄積した経験によって、全体像を把握し、今いる場所、見えない先や他者の存在を感じる。



主観的な経験の積み重ねによる想像と想起だからこそ

自由に広く、
ぼーっとできる。

